

報道関係各位

東京ミッドタウンマネジメント株式会社

次世代を担うアーティスト・デザイナーを発掘、応援する

「Tokyo Midtown Award 2017」結果発表

受賞作品展示：10月13日(金)～11月5日(日)

東京ミッドタウン(事業者代表 三井不動産株式会社)は、「JAPAN VALUE(新しい日本の価値・感性・才能)」を創造・結集し、世界に発信し続ける街”をコンセプトに街づくりを進めています。その活動の一環として今年で10回目の開催となる、「Tokyo Midtown Award 2017」において、この度、計1,489点の応募作品の中からグランプリ2作品を含む受賞14作品が決定しました。

【Tokyo Midtown Award 2017 グランプリ受賞作品】

<アートコンペ>

テーマ: 応募者が自由に設定
 作品名: 『地図の沈黙を翻訳せよ』
 受賞者: 金子 未弥



<デザインコンペ>

テーマ: TOKYO
 作品名: 『東京クラッカー』
 受賞者: 加藤 圭織



受賞作品14作品は、10月13日(金)から11月5日(日)までの約3週間、東京ミッドタウンのプラザB1 オープンスペースにて展示します。また、期間中、来街者の一般投票で人気作品を選出する「オーディエンス賞」も実施し、結果は11月10日(金)に東京ミッドタウン・オフィシャルサイトにて発表いたします。

■ 掲載時の一般の方のお問い合わせ先 ■

東京ミッドタウン・コールセンター
 東京ミッドタウン・オフィシャルサイト
 Tokyo Midtown Award 特集ページ

TEL : 03-3475-3100
<http://www.tokyo-midtown.com>
<http://www.tokyo-midtown.com/jp/award/>

Tokyo Midtown Award 2017 <アートコンペ> 受賞作品

<アートコンペ>では、テーマを応募者が自由に設定するものとし、東京ミッドタウンのパブリックスペースに設置することを意識したサイトスペシフィックな作品を募集しました。応募者自身が設置場所を選び、作品を提案できる自由さがある一方で、商業施設に作品を置くパブリックアートとしての構築や自身のテーマを厳しく問われるコンペです。

応募のあった327作品の中から2次審査を通過した6名の入選者には、制作補助金100万円が支給され、実際に東京ミッドタウンに作品を設置しました。今年は、六本木エリアのアートの祭典「六本木アートナイト」のプログラムのひとつとして10月1日(日)に最終審査を行い、各賞が決定しました。

グランプリ受賞者は、University of Hawai'i at Mānoa / Department of Art and Art History が実施するアートプログラムへ招聘されます。

■ グランプリ

受賞作: 『地図の沈黙を翻訳せよ』

受賞者: 金子 未弥(かねこ みや)

略歴: アーティスト(多摩美術大学大学院 美術研究科博士後期課程 修了)
神奈川県生まれ、在住



<作品コンセプト>

ここに刻まれているのはすべて都市の名前です。知っている都市名から、あなたはなにを思い浮かべますか。最近の出来事や、ささやかな思い出、誰かの声などでしょうか。では、都市名に潜む見えない記憶に耳を傾けてみてください。そこでは他者の記憶も古い記憶も内包され、ひしめきあっているはずです。雑音のような混沌とした記憶の総体を、私たちは「都市」と呼ぶのではないのでしょうか。

■ 準グランプリ

受賞作: 『rainbows edge VI』(レインボーズ エッジ シックス)

受賞者: 七瀬 綾乃(ななからげ あやの)

略歴: 彫刻家(広島市立大学 芸術学研究科博士前期課程 彫刻専攻 修了)
鹿児島県生まれ、広島県在住



<作品コンセプト>

私はひからびた植物、山や石、虹といった自然物や自然現象を中心的なモチーフにし、それらに独自の造形的な解釈、見立てを行い、木を素材とした彫刻作品を制作しています。それらのモチーフに潜み、私を魅了する「自然の時間」や「生と死」といった感覚を、普段見過ごしがちな存在を通して、通りかかった皆さんが遭遇できる空間になればと思います。

■ 優秀賞

受賞作: 『Invisible City』(インヴィジブル シティ)

受賞者: 遠藤 有奈(えんどう ありな)

略 歴: アーティスト(京都工芸繊維大学 工芸学部
造形工学科卒業、国際版画学校 II
Bisonte 版画1年コース 修了)
兵庫県生まれ、東京都在住



<作品コンセプト>

旧約聖書の中で語られるバベルの塔を現代的に再解釈、階段をメタファーとして象徴的に増殖、変容し続ける現代都市、現代社会を表現しています。塔は、その地域のモニュメント的な建築物の側面をもち、「見えない都市」は、その都市の象徴、あるいは、都市そのものをシンボルとした作品です。

■ 優秀賞

受賞作: 『顔の小屋』

受賞者: 大野 光一(おおの こういち)

略 歴: アーティスト(武蔵野美術大学造形学部
油絵学科油絵専攻 卒業)
東京都生まれ、在住



<作品コンセプト>

私は人の顔をモチーフに作品を制作しています。人にとって顔というものは特別大切な物です。顔は人間社会では名刺であり、パスポートであり、その人の心の内を写す鏡であり、それと同時に心の内を隠すマスクでもあります。顔には怖くて美しい、とても大きな力があります。それは誰もが持っている原始的な感覚です。私は人の顔の向こう、薄い皮膚の裏側にその人の魂のような物があると感じます。

■ 優秀賞

受賞作: 『imagine the crowd』(イマジン ザ クラウド)

受賞者: 松本 千里(まつもと ちさと)

略 歴: 学生(広島市立大学 芸術学部デザイン
工芸学科染織造形 在籍)
広島県生まれ、在住



<作品コンセプト>

これは手絞りの群集です。よく見ると向きやしわの入り方など、細かい個性があります。絞りの群れは拮抗したり、同調したり、何か話し込んでいたり、調子によって飛び出したりと、まるで私たち群衆のようです。

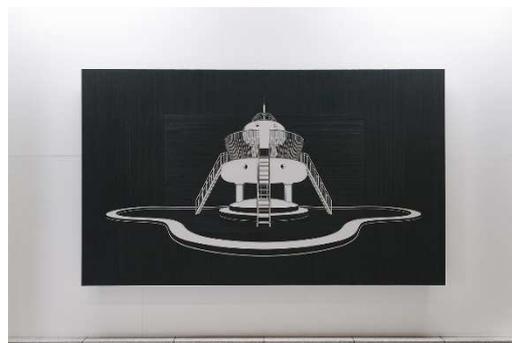
個と群集。それは細胞から銀河系まで、私たちはいくつもの集合体で成り立ち、そして常に囲まれています。作品からイメージすることは、それぞれ自分の意識の中にあり、集団で生きている現代人の想像力と向き合います。

■ 優秀賞

受賞作: 『四つの階段』

受賞者: 山根 英治(やまね えいじ)

略 歴: 美術作家(東京藝術大学大学院
美術研究科彫刻専攻 修了)
大阪府生まれ、東京都在住



<作品コンセプト>

私にとってこの構造物は、自らがこの世界のどこにどのように存在しているのかを確認できる方位磁針のような存在です。ひもで描くシンプルな線の情報から、空間や存在について問いかけてみたいと思いました。

Tokyo Midtown Award 2017 <デザインコンペ> 受賞作品

<デザインコンペ>の今年のテーマは、「TOKYO」。2017年春に10周年を迎えた東京ミッドタウン。それぞれの応募者が世界に向けて発信したい「東京」を表現した作品を募集しました。計1,162点の応募作品があり、グランプリ含め8作品が選ばれました。

応募作品の中から、“提案(プレゼンテーション)力”、“テーマの理解力”、“売り場の意識(消費者ニーズの理解力)”、“商品化の可能性”、“デザイン力”を基準に応募シートを審査。意匠権調査を経て、各賞が決定しました。

グランプリ受賞者を来春、国際家具見本市「ミラノサローネ」開催中にイタリア・ミラノへご招待します。また今後継続的に受賞作品の商品化等のサポートを行う予定です。

■ グランプリ

受賞作: 『東京クラッカー』

受賞者: 加藤 圭織 (かとう かおり)

略歴: アートディレクター、デザイナー / 2009年東北芸術工科大学 デザイン工学部卒業
茨城県出身



<作品コンセプト>

「東京タワー」がモチーフのパーティー用クラッカーです。クラッカーを鳴らすと、東京駅、日本橋、歌舞伎座など、たくさんの「東京を代表する名所や名物」の紙片が舞い散ります。紐を引くだけで、どこにいても東京の風景を思い起こさせてくれます。パーティーの演出はもちろん、これからの東京をより一層盛り上げてくれるアイテムになればと考えました。このクラッカーで、世界中に東京の楽しさを伝えることができれば嬉しいです。

■ 準グランプリ

受賞作: 『母からの仕送りシール』

受賞者: 山中 桃子 (やまなか ももこ)

略歴: デザイナー / 2012年専門学校 桑沢デザイン研究所 ビジュアルデザイン科卒業
神奈川県出身



<作品コンセプト>

生まれてはじめて上京するとき、わくわくする気持ちの中には、不安や寂しさがあります。旅立つ子どもの背中を見て、母は心配、嬉しさ、そして心からの応援があります。「東京はへんな人が多いからね」「野菜ちゃんと食べてる?」「いつでも連絡しなさい」。照れくさいけど伝えたいたくさんの言葉を、仕送りに貼るケアマークにしました。あたりまえだった母の言葉が、特別に感じる東京。遠い故郷から、想いを運ぶシールです。

■ 優秀賞

受賞作: 『東京はしおき』

受賞者: 6(ろく)

【メンバー】 本山 拓人(もとやま ひろと)
不破 健男(ふわ たけお)



<作品コンセプト>

TOKYO の魅力は、街に集まる多様な人々とそこで生まれる交流や文化だと思います。そんな都市としての成熟は、多くの川が流れ込む地形と、江戸時代より人の往来を繋ぐ、五百を越える橋によって支えられてきました。そんな文化的象徴としての「橋」をモチーフに、「はし」おきをデザインしました。個性豊かなはしおきは、カトラリーレストとしても使えます。TOKYO の歴史と文化を発信する、新しいおみやげにぴったりではないでしょうか。

■ 審査員特別賞 小山 薫堂賞

受賞作: 『江戸前ブラシ』

受賞者: 平井 良尚(ひらい よしなお)
吉野 萌(よしの もえ)



<作品コンセプト>

江戸前ブラシは、江戸、つまり今の東京で生まれた料理である「鰯」をモチーフにした歯ブラシです。食べ物で歯を磨くという真逆な体験を提供します。ヘルシーな日本食で口腔内もヘルシーになりましょう。鮮度が落ちたら（毛先が広がったら）新しい物をお使いください。

■ 審査員特別賞 佐藤 卓賞

受賞作: 『スカートせんす』

受賞者: 佐藤 翔吾(さとう しょうご)

嶋澤 嘉秀(しまざわ よしひで)

深澤 冠(ふかさわ かん)

木川 真里(きかわ まり)



<作品コンセプト>

女子高生のスカートを、扇子にしました。日本の Kawaii アイコンとしても知られるファッション性の高い東京にある高校の制服を、性別も年齢も国籍も超えて誰もが楽しめるファッションアイテムに。扇子に新しい風を吹き込み、東京が誇るかわいいの力をあらためて世界に発信します。

■ 審査員特別賞 柴田 文江賞

受賞作: 『ゲタサンダル』

受賞者: 富永 省吾(とみなが しょうご)

綿野 賢(わたの ただし)

浅井 純平(あさい じゅんぺい)



<作品コンセプト>

時代の流れとともに生活から離れていった「下駄」を、合成樹脂で再現したサンダルです。「伝統的な生活用品」を「現代的な素材」で再構築することで、古くから続く日本文化を、より気軽に身近なものにします。多様な文化が混じり合い、共存する東京。常にアップデートを続けるこの街らしい、新しい履き物です。

■ 審査員特別賞 原 研哉賞

受賞作: 『TOKYO 影皿』(とうきょう かげざら)

受賞者: 田村 有斗(たむら ゆうと)
岡 駿佑(おか しゅんすけ)
阿部 真里子(あべ まりこ)
佐藤 絢香(さとう あやか)



<作品コンセプト>

世界のどこにいても、晴れた日の東京を感じられるストリートな紙皿。

東京中に溢れ、景観を損なうと嫌われがちな無秩序な人工物たち。しかしそんな人工物の溢れる風景は、いつの間にか私たちの原風景になっています。この紙皿を使えば、いつでも、どこでも、東京の街中でピクニックをしている気分になれるかもしれません。

■ 審査員特別賞 水野 学賞

受賞作: 『TOKYO WAGARA』(とうきょう わがら)

受賞者: 須田 諒(すだ りょう)
鹿野 峻(しかの たかし)
柳澤 駿(やなぎさわ しゅん)



<作品コンセプト>

東京都のシンボルマークを用いた和柄です。世界には様々な特有の柄が存在し、それぞれの文化を象徴して受け継がれてきました。

東京を象徴するマークを繋げ、無限に広がってゆく和柄模様へと発展させる事で、東京独自の粋な文化やコミュニケーションが世界へ広がってゆくよう思いを込めて。未来への発展を願った「TOKYO WAGARA」です。

※アートコンペ、デザインコンペの各受賞作品画像は、以下の URL よりダウンロードいただけます。

<http://www.tokyo-midtown.com/press/award.html#art>

<http://www.tokyo-midtown.com/press/award.html#design>

<アートコンペ>審査員総評



Photo by
Takaaki Koshiba

■ 川上 典李子 / Noriko KAWAKAMI

(ジャーナリスト / 21_21 DESIGN SIGHT アソシエイトディレクター)

設営の時から作品を見ていたが、唐突にそこにあるのではなく、以前から存在していたかのように自然にあり、通り過ぎる人々が自然に作品に近づいていくという光景があった。そのように存在感のある、実力ある作品を審査過程で選べたのだと実感が持てた。

若い皆さんなので、思考や考え方や造形力は、いまも、しばらくこれからも日々揺れ動きながら進んでいくものだと思うが、それが如実に出ることを昨年以上に感じた。そのなかでも2次審査から各々に成長し、次の段階に進んでくれたことを感じる事ができたのが、良かったと思う。グランプリ、準グランプリを獲れなかった方も今回で区切りをつけるのではなく、ぜひとも次に進んでいってください。



■ 兎島 やよい / Yayoi KOJIMA

(キュレーター / 十和田市現代美術館副館長 / 明治学院大学非常勤講師)

東京ミッドタウンという場所でサイトスペシフィックなアートを考えるということは、この場所の特殊性について考え、意識すること。どこから東京を、東京ミッドタウンを見るか。美術館やギャラリーではない場所で作品を発表する意味を、どう見出すか。持てるものすべて動員してコンセプトを考え、作品提案してほしい。このコンペは全国からここを目指す人たちにとって、また、東京で生活する人たちにとって、重層的な課題やきっかけを与える場ともなっている。

最終審査に残った6作品はそれぞれの作家が力を発揮し、完成度の高いものとなっていた。今回グランプリや準グランプリを獲れなかった人にも、また挑戦してほしい。成長した姿を審査員一同、楽しみにしています。



Photo by
Herbie Yamaguchi

■ 清水 敏男 / Toshio SHIMIZU

(東京ミッドタウン・アートワークディレクター / 学習院女子大学教授)

書類審査、模型審査とともに完成作を想像しながら行うのだが、今回はすべての作品が、私が予想していたレベルをクリアしていた。さらに私が予想した以上のものをもっていた作品がグランプリと準グランプリという結果になった。コンセプトはすごく重要であり、コンセプトがあっても造形力が追いついていなければよくないし、反対に、造形がいかに面白いものであっても、コンセプトがないものは今後どうなっていくのか、先が読めないのもそれ良くない。やはりコンセプトと造形力の双方が重要である。さらに言えば、コンセプトと造形力のどちらも一定の力があるが、そのどちらかがとび抜けていてアンバランスであるときも面白い作品が生まれる。今回最終審査に残った作品でもコンセプト、造形力のどちらかが不足していたものもあった。今後の精進に期待したい。



撮影: 中川正子

■ 鈴木 康広 / Yasuhiro SUZUKI

(アーティスト / 武蔵野美術大学准教授
東京大学先端科学技術研究センター客員研究員)

このアワードの魅力は2次審査で作者の生の声を聴くことで、作り手が今感じていることに触れながら作品に出会うことです。審査の過程では、何をもって優れた作品とし、評価の対象が作品そのものなのか、作家のポテンシャルにも目を向けるべきなのか、度々議論になりました。作品制作の発端となる作家独自の視点、それを作品へと昇華させる意欲、素材と向き合うなかで磨かれた造形力とともに、観客との間に示されるコンセプトの位置付けについて意見が分かれました。現代のアートはコンセプトがあってこそ、はじめてアートとしての価値を持ちうるのか？今年はそのようなことを強く意識させられました。その中で、やはり現時点の成果のみならず、答えのない一つの現象として、未来に開かれた存在として作家と作品を捉えることが重要なのではないかと、考えを巡らせながら審査に臨みました。



■ 土屋 公雄 / Kimio TSUCHIYA

(彫刻家 / 愛知県立芸術大学教授 / 武蔵野美術大学客員教授)

どの作品も完成度が高く、一見してそんなに大きな開きはなかったと言えるほど、今年のクオリティーは高かった。Tokyo Midtown Award 審査基準の中に、「サイトスペシフィック」があるが、建築やランドスケープの分野ほど、特に彫刻などでは、その言葉をなかなか読み解けない。だが、本コンペ自体が、「サイトスペシフィック」という言葉を拡大して受け止めようとしていて、幅広くアーティストがノミネートしてくれているように思う。そういった意味でも今回の6作品はかなり多様性に富んだものになったように思えて、観る人に楽しんでもらえるものになったと思う。



Photo by Miura Haruko

■ 中山 ダイスケ / Daisuke NAKAYAMA

(アーティスト / アートディレクター / 東北芸術工科大学グラフィックデザイン学科教授)

今年の応募作には、手触り感や物質感が魅力的な、現場で対峙してみないと伝わらないタイプの作品が多く、デジタル時代ならではのアート表現の原点回帰的な風潮を感じました。

自分自身の実感としても、いつの間にか面白いテクノロジー表現が自然に日常生活の中に溶け込んでしまっているのも、まだまだ人の手が為すことで語ってくれるような作品を支持していた気がします。

審査結果としても、作家の考え方を手仕事に当てはめた作品が上位賞に選ばれたので、きっと他の審査員の皆さんもそんな時代感を共有していたのでしょう。少しだけ「今のアートってなんだろう?」と問いかけられる、Tokyo Midtown Awardらしい審査になった気がします。

<デザインコンペ>審査員総評



photo by
Hiromi Shinada

■ 小山 薫堂 / Kundo KOYAMA

(放送作家 / 脚本家 / N35inc・(株)オレンジ・アンド・パートナーズ代表 / 京都造形芸術大学副学長)

私の記憶が確かならば…審査員全員が認める作品が一つも出なかったのは、今年が初めてである。記念すべき10回目のテーマは「TOKYO」。実にストレートかつ、たくさんの興味を集めそうなテーマだが、期待値が上がった分、審査が非常に難しかった。応募作の切り口もこれまでで最もバラエティーに富んでいたのだが、特に多かったのが「江戸切子」と「東京タワー」をモチーフにしたもの。みなさん、そんなに江戸切子が好きですか?江戸切子のグラスを持っていますか?東京タワーに最後に行ったのはいつですか?無関心な人々を振り向かせ、空っぽの心に愛を注ぎ込むのがデザインの力だとすれば、まずはデザイナー自身がそこに偽りなき愛を込めなければ、説得力に欠けてしまうのかもしれない。



■ 佐藤 卓 / Taku SATOH

(グラフィックデザイナー)

Tokyo Midtown Awardのデザインコンペは、毎年ユニークな提案が集まってきて、我々審査員も「あ!そういうアイデアもあったか!」と納得させられ、大いに楽しませてもらっている。それが「モノ」の場合もあれば、意外な「コト」の提案でもあったりする。過去の受賞例としては、一年の真ん中の日を祝おうという「MIDDAY」などは、その代表格だろう。このような意外なアイデアが、今年は残念ながら見当たらず、過去の受賞作品に影響を受けた作品が多かったように感じられる。審査員全員が投票した満票の作品が今年はなかったことが、それを物語っていたように思う。しかし、こういう時こそチャンスでもあるので、今後に期待したい。



■ 柴田 文江 / Fumie SHIBATA

(プロダクトデザイナー / 武蔵野美術大学教授)

今年で10回目となる審査会も多くの楽しいデザインに出会えました。例年との違いとしては、サービスなど無形のアイデアが多かったように感じました。単に美しいという表層を整えるだけがデザインの役割ではないことが広く認知されているのだと、審査会を通じて再確認できました。今後のアワードは、色や形というデザインのわかりやすい部分よりも、提案のユニークさや企画の実現性などを重点的に読み込むよう変化してゆくのではないかと予想しています。そんな中でも、提案と表現の総合力が秀でて高い作品が上位に選ばれる結果となりました。この中から、アワードを飛び出して世の中に羽ばたく作品が生まれることを期待しています。



■ 原 研哉 / Kenya HARA

(グラフィックデザイナー / 武蔵野美術大学教授 / 日本デザインセンター代表)

東京タワーに関するものが多く、還暦直前59歳の東京名所ながら、その根強い人気に、同い年として勇気もらった気分です。今回、不可避の事態が発生し、僕は他の審査委員と同じ場所での審査に参加できませんでしたが、一人だけの審査に見落としがないようにと、いつも以上に集中できたことは新鮮でした。印象に残っているのは、東京の名所で、「記念スタンプ」ならぬ「毛筆で名所の名前を書いてくれる」というサービスでした。腕に覚えのある老人が、力を発揮してくれる情景が目に見え、素晴らしいと感じました。東京の複雑な鉄道路線を、色とりどりの縮れた「グミ」にする案も、面白いと思いましたが、いずれも受賞には至っていませんでした。



■ 水野 学 / Manabu MIZUNO

(クリエイティブディレクター / 慶応義塾大学特別招聘准教授)

デジタル化が進み、インターネットが生まれ、世界が狭くなったと言われるようになった現代において、実験により得られる価値意識の変動が起こっている。それはつまり、人々の記憶に造形される、都市(風土)の価値自体が変動しているということでもあるのではないだろうか。この変動期に入った「世界」の中で、都市の魅力をいかに、より良い記憶の定着へと導くことができるかが、今後100年の都市の価値そのものをも決めてしまうと言っても過言では無いだろう。その価値向上の、多くの部分を担うことになるであろう「見え方のコントロール」。この見え方のコントロールとはつまりブランディングであり、デザインでもあるのだ。100年200年を見通す、若く強いデザイナーがこのアワードから輩出され続けることを期待して止まない。

<アートコンペ>概要

テーマ：応募者が自由に設定

応募期間：2017年4月27日(木)~5月18日(木)

審査方法：1次審査(書類審査)→2次審査(模型によるプレゼンテーション)→最終審査

審査員：川上 典李子 / 児島 やよい / 清水 敏男 / 鈴木 康広
土屋 公雄 / 中山 ダイスケ 以上6名

協力：TOSHIO SHIMIZU ART OFFICE

後援：University of Hawai'i at Mānoa / Department of Art and Art History

賞(賞金)：グランプリ(1作品)----- 100万円

準グランプリ(1作品) ----- 50万円

優秀賞(4作品) ----- 10万円

- 別途、入選者1人、または1組につき、制作補助金100万円を支給いたします。
- グランプリ受賞者は、University of Hawai'i at Mānoa の Department of Art and Art History が実施するアートプログラムに招聘いたします。(※1)
- 入賞者6名は来春の「ストリートミュージアム」に参加(※2)

※1 University of Hawai'i at Mānoa / Department of Art and Art History について

歴史ある本プログラムは、これまで数多くのアーティストや学者が招かれ、ハワイの芸術文化に触れながら、各種のアートプログラムを行っています。受賞者には、実際にハワイに滞在し、ハワイ大学のアートプログラムに参加しながら作品を制作する機会が与えられます。

※2 東京ミッドタウンが春のイベントの中で開催する「ストリートミュージアム」(2018年初春予定)での作品展示の機会が与えられ、新作の発表の場として活用できます。また、ワークショップなどの開催も予定しています。

<デザインコンペ>概要

テーマ：「TOKYO」

応募期間：2017年6月23日(金)~7月24日(月)

審査方法：書類審査

審査員：小山 薫堂 / 佐藤 卓 / 柴田 文江 / 原 研哉 / 水野 学 以上5名

協力：東京ミッドタウン・デザインハブ、株式会社 JDN

賞(賞金)：グランプリ(1作品)----- 100万円

準グランプリ(1作品)----- 50万円

優秀賞(1作品)----- 30万円

審査員特別賞(各5作品)---- 5万円

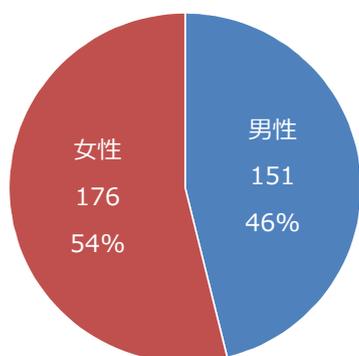
- グランプリ受賞者を毎年4月に開催される「ミラノサローネ国際家具見本市」開催中に、イタリア・ミラノへご招待いたします。(※1)
- 受賞後、商品化のサポートを行います。

※1 毎年4月に開催される「Salone del Mobile Milano / ミラノサローネ国際家具見本市」。世界最大規模の家具見本市として開催される「ミラノサローネ」は、デザイナーが自身の作品を発表できる展示場「サローネサテリテ」が設けられ、若手デザイナーの登竜門的な場所としても知られています。

Tokyo Midtown Award 2017 応募状況

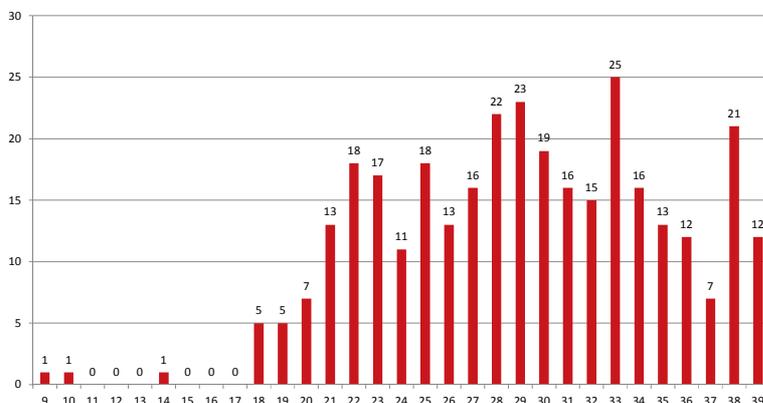
<アートコンペ> 応募者データ

● 応募総数男女比 (件)

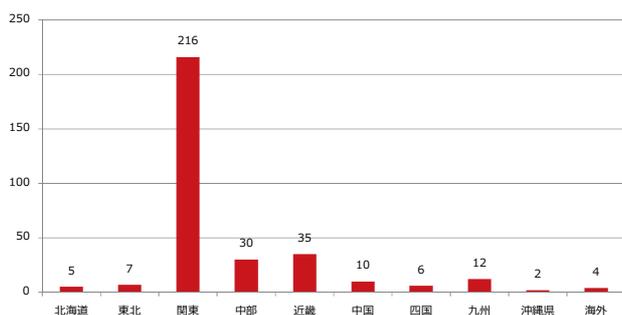


● 年齢分布 (件)

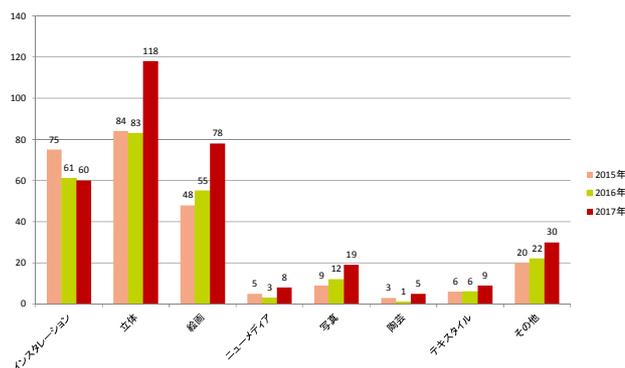
平均年齢 29.1 歳



● 地域別応募者数 (件)



● 分野別応募者数 (件)

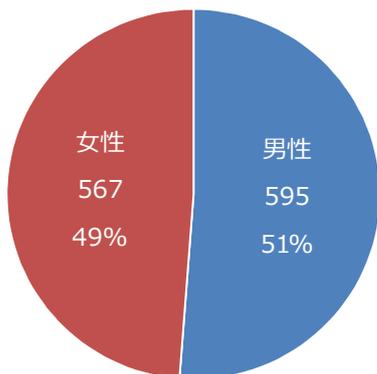


■ 応募者数…327 名(組)

■ 傾向…今年度は昨年比 134% の応募数があり、応募傾向としては、特に立体、絵画で昨年を上回りました。また、昨年に引き続き、東京ミッドタウンという場所をどう捉え、「公共空間におけるアート」に向き合い提案するか、という点が、各審査過程でフォーカスされました。年々応募の質が上がっており、様々なバックグラウンドを持った方が応募されました。

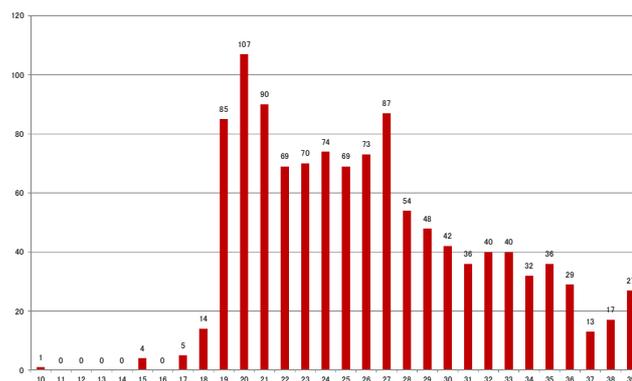
<デザインコンペ> 応募者データ

● 応募総数男女比 (件)

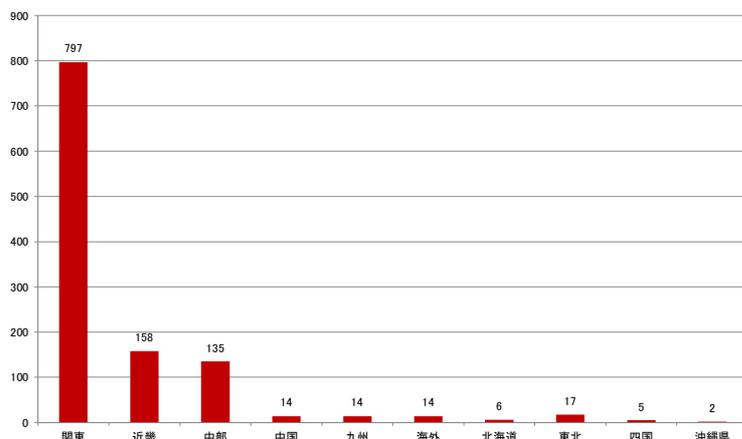


● 年齢分布 (件)

平均年齢 26.1 歳



● 地域別応募者数（件）



■ 応募作品数…1,162 点

■ 傾向…今年のかデザインコンペ>は「TOKYO」をテーマに募集し、総計 1,162 点、最年少 10 歳の方からご応募がありました。東京の交通や観光に関する提案の他、例年以上にコンセプトやサービスに関する提案を多くいただきました。「TOKYO」というテーマが持つ多様性、現代性の反映と捉えています。

東京ミッドタウン・オーディエンス賞

10月13日(金)の授賞式にて発表する<アートコンペ>、<デザインコンペ>の受賞作品は、10月13日(金)～11月5日(日)まで東京ミッドタウン・プラザ B1 展示スペースにて展示されます。また、期間中、来場者の一般人気投票を実施し、「東京ミッドタウン・オーディエンス賞」を決定します。

結果は11月10日(金)に東京ミッドタウンオフィシャルサイトにて発表いたします。



▲ 昨年の投票の様子

TOKYO MIDTOWN AWARD 10th YEAR EXHIBITION

デザインコンペは、2008 年より年ごとにテーマを設定し開催してきました。「Japanese New Gift 日本新しい手みやげ」「Anniversary」「おもてなし」など、様々なテーマを通して受賞した過去作品 77 点を、一挙に展示いたします。

「Tokyo Midtown Award」から生まれた数々のアイデアを、ぜひご覧ください。

【日時】 10月13日(金)～11月5日(日)

【場所】 東京ミッドタウン プラザ B1

これまでの受賞作は「Tokyo Midtown Award」公式サイトでご紹介しています

(<http://www.tokyo-midtown.com/jp/award/result/>)



▲ 過去に受賞作品一例